

# 「全共闘三〇年 時代に反逆した者たちの証言」(実践社・一九九八年)

前田裕晤『理論戦線』四八号(一九九六年六月五日刊)

原題は「関西ブントは大衆と共にあろうとした」

## いつでも大衆と共にあろうとした



前田裕晤(当時・大阪中央電報局労働運動研究会)

——長年労働運動に関わってきた前田さんには、全共闘運動と同時代の労働運動がどんな状況だったかをお聞きしたいのですが。

●私には「全共闘三〇年」という意識はない。何故かというところ、労働運動にとっては六〇年安保時とそれに至る共産党時代の分派闘争とにからみがある。

「全共闘三〇年」と区切ってしまうと、ブントが形成される過程での、共産党の中での様々な理論闘争のみならず、個別課題に対する戦術、方針、闘い方を巡って分岐が始まってくプロセスが切断されるように思われる。

第二の点は共産党から割れてブントを作るときに、私の場合は労働戦線になるが、当時の電々職場の中では千代田丸闘争や警職法闘争の進め方を巡って共産党中央主流派と我々職場活動を

担っている党員活動家との間に意識の違いを感じだした経緯がある。

その一連の連続した過程でブントを位置づける必要があると判断する。

——なるほど、それではその当時の大阪中電(大阪中央電報局)の事からうかがいたいと思います。中電労研というのはいつ頃、どういう経緯で始まったのでしょうか。

●一九五〇年の秋、電気通信学園(旧通信講習所)をレッドパージで要員不足になった通信職場に補充のため繰上げ卒業で大阪中電に配属された。パージ後の職場状態は、反動の嵐が吹き荒れ、当局と民同派組合全電通とが癒着した暗い職場であった。

勿論、共産党活動家不在の中で、辛抱できない同期の仲間四、五人と協力して仲間作りから多くのサークルを作り、細胞も再建していったが、その中に大阪中電労働運動研究会(いわゆる第一次労研)がある、中心は夜勤で、昼間は大学に通学していた連中が中心だった。

——昼間大学というのは、どこに。

●私の場合は同志社大学であるが、当時は敗戦直後でもあり、親は戦死、或いは病死等で食うためにも、ましてや進学したければ自分で稼ぐしかないという環境だった。

田舎の旧制中学時代の恩師が、勉強したければ通信士になればと進められて、モールス通信を学び、夜は電報局で働く道を選んだ。

通信職場は二四時間、休むことなく動いており、日勤・夜勤・宿直の勤務体系があり、中卒から採用があるので、日勤して定時制に通う者、夜勤は午後四時から十時までだから昼間通学ができる勤務体系で、私は高校二年間と大学の四年間、大学院は途中で立命館に変わって、計一三年

間を夜勤生活をした。昼間は学生運動、夜は職場で労働運動と言う二重の運動を経験した。

労働運動の専任となるのは、六二年に中電支部の執行委員に当選してからである。

——他の人々の通学先は。

●当時の中電には外国通信（後のKDD）を含めて二四〇〇人ぐらいいたが同志社大、関西大、立命館大、大阪大、大阪府大、大阪市大、大阪学芸大、だいたいこの七つが多く、他に大阪外大、神戸外大もいて、夜勤組で約四十数名が通学していた。

この中で労働運動の問題を自身の勉強と関連させて、整理・検討しようとして作られたのが労働運動研究会であり、経済学部の中中には経済分析を、法学部は労働法関係を担当する形の研究会であり、当初は運動体の位置付はなかった。

ところが千代田丸問題をめぐって、検討を開始したところ、単なる研究では済まない重大な事態だとの認識にいたり、全電通本部の対応は誤りであるとして声明をだしたのが始まりである。

——第一次労研の活動時期は何年間ですか。

●五三年の冬から五六六年まで、三年間くらい続く。

### 千代田丸闘争と共産党中央への疑問

——それが闘争組織にかわっていく契機となった千代田丸闘争とは。

●千代田丸とは電々公社の海底敷設船の名前で、アメリカ軍の要請で朝鮮海峡の海底に電信線を

敷設することになった、当時で言う李承晩ラインを越えないと工事はできない。ところが李ラインを越えると韓国軍から弾丸が飛んでくるし、現にあった。

安全措置がとられない限り、出航はできないとして、千代田丸が所属する本社支部は出航拒否を指令した。

その指令を巡って、全電通の本社支部三役が解雇される、当時、本社支部は左派の牙城で、共産党活動家が多数派であり、中央本部の民同が嫌って、電々公社の解雇を承認したのである。

これには関東の左派支部や共産党系のシンパを含め、一斉に解雇反対闘争を取組むのだが、関西の共産党系は「今は社会党系民同派との統一行動が重要な時期である」として本部の解雇承認方針を支持した。

——東京と関西の共産党細胞同士が対立するわけですか。

●その通り、その日共関西フラクの方針に、不当に首切られた労働者を追放するのは何事かと、電通労研は公然と反対し、千代田丸対策委員会をつくり下からひっくり返しにかかる。

大阪中電支部では解雇承認を決めた民同執行部とそれを支持した日共細胞指導部の方針を、支部委員会で否決した、この影響は大きく、五七年の全国大会では、千代田丸での解雇を認めず闘うとする方針を決定するに至る。

次に五八年の警職法反対闘争の出来事がある。全電通中央本部は反対闘争のヤマ場に大阪中央電報局をスト拠点として突入を指令した。

当時の公労法はストが禁止されており、毎年の春闘でのストも違法行為として指導責任を問わ

れ、処分は必至の事態であったが、時の大阪中電支部委員長は山岸章（のち、全電通委員長を経て初代連合会長となる）で、山岸はあろう事か、ストライキ指令の返上を突入前日の支部委員会に提案した。

会場の中電講堂は、緊張し、怒号と野次の飛ぶ支部委員会は、若い委員の頑張りで、指令返上提案を否決、スト突入を確認した。

ところが執行委員全員は、二名の黨員執行委員も含めて、労務課の会議室に直行し、労務課員が直ちに鍵を閉める光景を目撃したのだから、怒った支部委員有志は、職場活動家を招集し喫茶店マツラに集め、スト破りの協議が当局も含めて検討していると判断した。しかも細胞指導部も関与している気配を感じた我々は、臨時執行部を作り、青年行動隊をスト防衛のため全員を三つの独身寮に宿泊させ体制を整えた。

ところが結論は、本部から「暁の指令、スト中止」が出て、幻の臨時執行部と言うことになってしまった。

しかし、この事件は二つの相反する結果をもたらす事になった。

一つは、山岸の指令返上の責任が消えた事である、おそらく彼の返上後の取る道は、当局との協議の上である以上、組合脱落管理者の道しかなかったのが、以後の組合幹部の道を残した事であり、それが総評解体策動の中心となり、連合会長に迄至ったのだ。

第二の問題は、スト体制の確立に動いた黨員と、民同方針に同調した黨員（細胞指導部も含めて）との内部対立が始まったことである。「反帝・反スタ」等の理論的な問題では無く、運動の

進めかたをめぐって、以前の千代田丸事件も含めて、党の傾向はおかしいとの意見が出だした。私は一方で京都では学生運動にも携わっていた経緯があり、私がオルグして党に入れた連中に、労働運動の現状を語る場を何回か持ったが、五九年の夏の段階では同志社の後輩連中はもう学生運動は共産党の指導の下ではやれないとの結論に達したとの事で、逆に驚かされる始末で、初めて共産主義者同盟の名が出てきた。

## ブントの組織化と第二次電通労研の結成

——党と学生運動との対立が激化していることは知らなかった？

●そこ迄きているとは知らなかった。京都府学運の中では、同志社と京大はブントで統一しているが、立命は党との決別は賛成だが、ブントなのか別組織なのかで論議中とのことだった。

彼等にしてみると、私に同志社でオルグされたが、その時点では立命館の大学院生だった。逆に彼等から、どうするのかを問われる事になった。

私の所属細胞は大阪中電なので、立命の細胞には一切顔出していない、その論議にもタッチしていない、そこで職場の黨員仲間と相談をする事にして京都から大阪に向かった。

中電の信頼できる黨員仲間を集めて党と学生運動の対立問題や、私たちが体験した事態とも関連させながら論議をした、五・六人がもう辛抱できないと言いつ出した。

その中に、立命大に通学している者がいたが、私から紹介状をつけて立命細胞の星宮、穴戸た

ちに連絡をとったAがいたが、これ以降Aは星宮を媒介として革命的共産主義者同盟（第四インター）に惹かれてゆく、同時に前田が同志社の後輩との会談があった事がわかった時点以降、中電に第四インターのオルグが入ってくる。

——ブントよりも先に革共同関西派がオルグに入ったんですか？

●その通り、指導者は京都府委員会の大屋史郎（西京司）で、彼の意見書や文書が手に入ることになった。

一方で京都では、ブントに組織替えの方針が決まった時は、学生ばかりで労働者はいない、おるとすれば前田で院生だが夜は労働者だとの認識ぐらいで大阪中電のもつ労働運動への政治的影響力や位置を持っているかは知らなかったと思う。

東京では党港地区委員会が山崎衛委員長を先頭に労働者部隊が離党し、ブントに合流してゆく経緯があり、東大より古賀（農学部、情況の古賀とは別人）と生田の二人が大阪に飛んでくる。

後輩の同志社学友会委員長の高野澄の案内で会談、結局、古賀らのオルグによりブント加盟を決断する。

古賀、生田この二人の情熱的な「新しい党を作る」のオルグは凄かった。これ以後、中電でのブントの組織化を始めることになる。

——その時、古賀さんと生田さんはどんなオルグだったのですか。

●考えてみると、理論的なオルグでは無かった、むしろそのままに革共同のオルグを受けていたが、国際主義や平和共存路線の問題、トロツキーの評価等について論争をしていたが、党内闘争

の敗北の原因についてと、新左翼というより旧左翼に認識があり、理論的な学習での組織化は進めるが、労働者組織を作って、加入戦術（社・共）には抵抗感があり、体質が合わない。

しかし中電からは三人は既に加入していた、だが大半の連中は、もっと公然と闘いを展開しないと、大衆は組織出来ないとの受け止め方だった。

党との対立が公然化するのには安保闘争の、六〇年一月一六日の岸訪米反対闘争で起きる。中電青年行動隊は阻止闘争のため大阪上京団の一隊として参加するが、党大阪府委員会は挑発分子全学連が羽田空港に突入しているとして、羽田参加の中止を決定するが、動員者は、是非を巡って大激論になるが中電青年行隊は羽田に参加し、総括集会では多くの大学自治会旗の中で、赤い組合旗は中電青年行隊旗、唯一つだった。

中電の参加者は全員が黨員だったが帰ると待ち構えていたものは、私も含め全員に党の査問だった。

——結果はどうだったのですか。

●平和を守る会の責任者をやっていた人は、そこから外され、民青大阪府副委員長の活動家は民青から追放された。

これからの一年間は、府委員会、地区委員会、電通産別G内での論争があいつく事になり、中電細胞は不良細胞の烙印が押されることになる。

六一年四月、『アカハタ』紙上に、前田、青木、伊藤の三名がマル秘の苦の本名で「関西でのトロツキスト発覚」として除名が公表される、ここまでの間に前田の査問を巡って、中電の通用

門に車数台で乗付けた府委員会は、ピケ迄も張って、退去時の私を強制連行しようとして、その行為に怒った中電細胞のメンバーと大喧嘩になる、党の「中電事件」と言われるのはこの件であるが、それもやはり中電細胞は解散の道を迎えることになる。

細胞は解散したが、傾向として構造改革派、ブント系、第四インター系の三グループに別れるが、統一行動の為に様々な努力が成されたが、基本的に前衛党論で思惑が異なっている、そこで、労働運動に限定した責任ある組織として出来たのが、第二次電通労研である。

——ブントという事ではなく、三派というか諸派の統一戦線のものだったのですか。

●その通りだが、すぐに横改派は出ていき、民同派と統一戦線を組む事になり、ブント系、インター系、さらには社青同左派が参加して労研運動がはじまるし、大阪市外電話、神戸、徳島、福岡、東京からは新宿、三田、本社も含め全国電通労研が結成される。関西では、ブントの労働者戦線は一気に拡大する、全通、国鉄、自治労と広告関係に特に広がった。さらに、京大・同志社・大阪市大の学生活動家をオルグとして労組の書記に配置したが、効果は抜群で、広告労協では関西の三役を握るに至っている。大阪総評にも進出し、オルグだけではなく、青年部長を握る事もあった。

労音とか労演等の文化組織にも進出し、六九年の中電マッセンスト問題で大阪のブント労対が解散するまでは、四・五百の労働者部隊が作られていた。

我々がブントを作ったのは、日共の誤れる前衛党ではなく、新しい前衛党をどう作るかであったが、電通労研は大衆運動の具体的な闘いを通じて、前衛に結集する労働者を、結果的に結集出

来るかと言う事だった。

我々が作る組織とは何か、と言う論議は常にあり、まずは一朝一夕にはできない事を前提に、組織作りだけが目的ではなく、運動の発展を重視する気風がまずあり、その背景には、当時の共産党入党時の必須文献の「整風文献」劉少奇の著作の影響がある、本来は党員の活動スタイルを述べたものであるが、大衆に誤りがあるうとも、その闘いの先頭に立った上で、誤りを正せとの活動家としてのモラルは、こびりついていたからこそ、共産党の前衛性を巡っての闘いができたのである。

### 自分たちが党だという意識

●労働運動に則して言えば、自覚した、或いは問題を感じた労働者は、それをいかに大衆の中で検証するかが問われる、オルグとしての立場になる訳だがそれは大衆が受け入れてくれないければ自分個人がいかに正しいと思っても、それは通用しない、我々には常にその事が問われていると言う事だ。

もう一つは、共産党の一枚岩の団結と言う神話への疑問である。どうもおかしい、おかしいと感じていた現状に、決定的な影響を与えたのは小林勝の小説「断層地帯」である。

悩んでいた中電の党員は、「断層地帯」を回し読みをしながら、読み終るやすぐ脱退、脱党届けを出してゆく。

— どういう小説なんでしょうか。

●著者小林勝の体験の小説化と言われている、敗戦後、朝鮮から引揚げた青年が早稲田に入り、学生運動のなかで共産党に入党し、朝鮮戦争に対し、中核自衛隊（党の軍事組織）の一員として武装闘争を闘うが逮捕され、長期間拘留所に勾留され、その間に親しかった同志が国際派として除名され、出所すると六全協で党が変わっていた、党とは何かと自問自答をする、前衛とは党とは、自分自身なのだと言論をだすというものだが、それが自分達の除名問題等で党の上部と対立した時、小説の中身が二重写しになってくるし、そこに自分達が党だという意識が確認されたといえる。

この問題意識を持ってブントに入りまたブントの労働戦線組織した。

六・一五闘争後、ブントの内部対立が始まり、関西はどうするかが問題になるが、指導部の北小路（敏）、小川（登）らは全国委員会（革共同）に行くと言い、一方で関西はまとまるべきとの意見もあり、労対は私が責任者だったから労働者メンバーを集めて討議した結果、当時は共産同関西地方委員会労対部としてあったが、一回や二回の闘争でつぶれるものを目指したのではない、我々は共産主義者同盟の名前は捨てないし残す、全国の労働者部隊と連絡をとって、我々が共産党から決別して新しい組織を作る目的のために努力する決議を六一年の暮れか六二年の初めにする。

そこに関西の学対も同調し、新たに公的組織として関西労働者協会をつくる、政治局を構成したが、佐野茂樹、佐藤浩一、浅田隆、仲尾宏に私らだったと思う。

社学同としては新聞、渥美、清田、中島がおり、その指導は佐野、浅田あたり、佐藤と私は労働運動にまわり労働者教育と言う事で、関西労働者学園を作り、大阪・京都で労働学校を始め。

もともと六・一五闘争の前と記憶するが、ブントと学生組織の社会主義学生同盟（前身は反戦学同）だけでなく労働者組織として社会主義労働者同盟を作る計画があり、責任者は若いオルグがなるべきだとして、林紘義がすることになったが進まなかった。

一方、関西ブントは、ブントの全国組織化のために、全国会議を招集したり、オルグを派遣するなど統一の努力を続ける。当時、東京ではそれに呼応したのは旧港地区委員会の労働者部隊の高橋良彦（松本礼二）や、山崎衛、今評論家になつて森田実、葉山もそのグループの一員だったと思う。

学生では、味岡（修）や中大が中心で、明大グループも合流し、廣松（涉）もこの頃から関わってくる。その間に味岡らがプロモートして、中大学生会館で自主講座を一年半開講する。

— それはいつ頃ですか。

●六四年だと思うが、大学に金も出させ、認めさせて、事務局は高橋（茂）前沢たちで、藤本進治さんが哲学を、竹本信弘（滝田修）が社会思想史、私が労働運動史を受け持った。三人が関西から上京して行ったもので、講師料の大半は、関西ブント上京組の活動資金となり、ブント全国化、統一再建の試みが幾度となく繰返され統一委員会ができ、服部（信治、水沢史郎）やマル戦派も合意して再建大会の開催となる。

## 統一再建から分裂をへて

——統一再建六回大会ですね。その当時、東京の労働者部隊というのはどんな状況だったんでしょうか。

●電通関係では、新宿局に桜井優賞雄、三田局に高橋良彦（松本礼二）がいて電通西南支部の論議は、この二人が牛耳る状態で、他に本社支部があり、全通では中野、牛込、貯金が中心だった。他には教組、医労関係で民間は少なかったと思う。

ブントは再建されたが、その位置付を巡って、ヘゲモニー争いも含めて、最初から問題は残っていたみたいであるが、労働戦線の立場から見ると、これから出発するのに、内部の意見の不統一が組織的分岐になるとは考えていなかった、自分たちの力をどう拡大してゆくのか、闘争をどう組織化してゆくのかを考えていたし、党の存在は常に闘争との関係で考えていたから、ヘゲモニー争いの意識は全くなかった。

七回大会でマル戦派を追い出す云々の論議になった時には、信じられなかった。最後の調停が出来るのかどうかの場を私の家でやる事になり、佐藤、服部、成島と私で討論をし意見の一致をみて、佐藤と私は直ちに上京するが学対のメンバーは既に態度を決めており、尖鋭化していた。

——前田さんにとっては唐突というか。

●私にとっては、全くの唐突事で予想すら出来ていなかった、かなり論議があった様だが、私に

は意図的に隠されていたように思う、たぶんその頃から「大衆運動主義」というレッテルが私には貼られていた様で、事前に分かると反対されるし、労対も同じと判断していたからだろう。

——七回大会でマル戦派との分裂が六八年三月で、六九年の七月に赤軍派が分派する。分裂自体は結果的にはやむをえないとしても、何が問題なのか、組織的に整理されてゆくような過程が不十分ではなかったかと思えるのですが。

●当時を振り返ると、理論的な対立が統一組織の維持が出来ない段階に入ったとは思えない、むしろ時々の闘争の位置づけと闘い方をめぐって分裂したように思えるが、当然、多くの意見が論争されてしかるべきものが、対立すると直ちに組織分岐に発展する作風は誤りだと思う。

ブントが一番優れていた点は、闘争目標を大衆的に明らかにし、大衆闘争として展開してきた事だ、他党派からブントのオルグは人によって言う事が違ふとよく言われたが、闘争現場に常に身をおいた上での発言は、大衆感覚を受止める優秀性を示したものであって、系統的でない批判されようが気にはしていなかったのは事実だ。

赤軍派については、当初、関西政治局の会議で、武装組織として赤軍を作るとの提案があり、分派組織としての認識は当初は持っていなかった。

ただこのような点を、革共同全国委員会、後の革マル、中核からつけ込まれる隙があったし、主体性がないと批判された所以、だったろう。

しかし、現在の時点から振り返ってみた場合、「組織とは何か」という点は考えさせられる、批判点があるうとも関西的な運動展開は時機を得ていたと思われるが、組織そのものに対する認識

は、労働戦線の中心は共産党経験を持ち、党との闘争を経て、党から解放され、これから自分たちの組織を作るとしてブントを策定したが、学生運動のリーダーの殆どはその経験がない。

七〇年闘争になつてゆく過程で、この両者の間に溝が出てくるのは必然だったかもしれない。

### 東欧激変をへた今考えること

——学生運動の側は全学連を再建して七〇年安保を闘う、そのための戦術というふうに進んで行くが、労働戦線では、そうはいかないということでしょうか。

●労働戦線は実態の上に立ってしか戦術は立てられないし、組合での役職を持っているブントのメンバーであろうとも、彼の言動が大衆に受入れられなかったら、彼の政治力はなくなる。

いかに労働者の置かれている状況を把握し、認識できるかは運動の大原則である。

労働運動は、哲学者の運動ではない、そのいみでヘーゲルの「哲学者の生涯は、大衆よりも五歩七歩先を語るが故に常に悲劇的である。英雄は大衆より一歩先しか行かないから、歓呼で迎えられる」との指摘があるが、大衆と共にある英雄を、労働運動と置換えたら本質をついている。労働運動はマスの運動であり、労働者が納得しないと運動にならない、オルグの立場からすれば、自分の思っていることが初めから全部が通るとは考えていない、一からなのか、うまくいって三からなのか、それをいかに拡大するのか、と言う点から出発する。

この発想点は、前衛党観との関係では最後まで整理されなかつたし、できなかつたと言える。

状況を無視して、原則論を展開しても無意味であろうと思うが、特にベルリンの壁崩壊以後の激変をみた場合、前衛党観の見直しが迫られているのは間違いない、しかし社会主義そのものの本来的なものまでの否定論が横行するのは納得がいかない。

私見ではあるが、再度の見直しと検討が必要だし、その努力を否定しようとは思わない。だがその結論が出てから運動の構築という見解には同調できない、現実には、政治も、労働運動も動いているのであるから、そのなかで何を基準に運動の取組を始めるのかが問われると思うからである。

労働戦線の右翼再編と総評の解体攻撃にあつては、労働運動と労働組合の本来的性格が破壊されると判断した私たちは、右傾化に反対する全ての労働者と共闘を組んだ。

支持基盤を失った社会党が、解体の動きになったとき、護憲派勢力の結集に、現状での各政治グループの主体性を認めつつも、公選法上での政党ではあるが実質は「政治共同戦線」の結成に全力を上げたのも、現状での必然性と判断したからであるが、トータル的な社会的価値観が崩壊した今こそ、この努力過程と検証こそが、新たな社会的価値観の創出にもなると思うからである。

(聞き手・吉沢明)

〔まえだ・ゆうこ〕一九三八年生まれ。全労協常任幹事。大阪全労協議長。